ＩＩＡＳ「ゲーテの会」ブックレット
（VOL. 01069）

未来に向かう人類の英知を探る
－ 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか －

特別企画
（芸術・音楽分野）

アメリカ大統領とハリウッド

－ 政治と文化（映画）の関係を探る －

公益財団法人国際高等研究所
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト

本ブックレットは、2019 年 3 月 19 日開催の第 69 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。
※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

未来に向かう人類の英知を探る

－ 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか －

アメリカ大統領とハリウッド

－ 政治と文化（映画）の関係を探る －

「従来の近代科学技術文明を乗り越え、新たな地球文明を創造するために、西洋が生み出した文明の成果と自らに固有の東洋的文化を総合する」これは、学研都市の建設理念であり、「ゲーテの会」の想いでもある。

本年度は、その基本テーマを「未来に向かう人類の英知を探る」とし、思想文学、政治経済、科学技術に加え、芸術音楽の各分野の第一人者をお招きし、日本の近代化に関わる人物と出来事を取り上げ、市民との哲学対話を続けてきた。

今回は、特別企画として趣向を変え、アメリカ政治研究の第一人者、村田晃嗣先生(同志社大学教授・前学長)をお迎えし、映画に描かれたアメリカ大統領の姿を通して、焦眉の現代的課題である「政治」と「文化」の関係を考えることとした。

講演要旨は次の通り。

①政治史(社会科学)と映画史(人文科学)との架橋による現実社会の把握の新たな視点を学ぶ。

②日本における政治とアメリカにおける政治との基本的差異を映画文化の成立過程を通じて照らし出す。

③特に、映画と戦争と民主主義をテーマに、アメリカの政治と日本の政治の今後のあり方を考える。

村田　晃嗣（Koji MURATA）

1964 年神戸生まれ。1987 年同志社大学法学部卒業。1995 年神戸大学大学院法学研究科博士課程修了。この間 1991～95 年米国ジョージ・ワシントン大学留学、2000 年同志社大学助教授、2005 年同教授、2011～13 年同法学部長、2013～16 年同学長。2018 年より日本放送協会(NHK)経営委員会委員。1996 年読売論壇新人賞・優秀賞受賞。1999 年アメリカ学会清水博賞・サントリー学芸賞受賞。2000 年吉田茂賞受賞。

著書に『現代アメリカが外交の変容レーガン、ブッシュからオバマへ』(有斐閣/2009)、『レーガン - いかにして「アメリカの偶像」となったか』(中央公論新社/2011)、『銀幕の大統領ロナルド・レーガン - 現代大統領制と映画』(有斐閣/2018)、『大統領とハリウッド - アメリカ政治と映画の百年』(中央公論新社/2019)などがある。

目次

Ⅰ　ハリウッド映画からアメリカの政治を知る……映画『スミス都へ行く』より
（１）背景となったアメリカの政治的事情
　①　アメリカ大統領選挙における人口対面積のジレンマ
　②　政治腐敗に１人で立ち向かう主人公を描く
（２）描かれた政治腐敗と描かれなかった大統領
　①　多数による専制が正義を潰す　～テーマはナチズム批判
　②　大統領を描かない理由
（３）アメリカ映画とアメリカ大統領の関係の変遷
　①　映画が発明される以前のアメリカ大統領の位置付け
　②　映画の登場とアメリカ大統領の権力の増大
　③　映画はいかに戦争に利用されたか
（４）戦後の映画産業とアメリカの政治
　①　攻撃対象となったハリウッド
　②　日本映画が映した日本の社会
　③　『ゴジラ』とは何者なのか
　④　ハリウッドとワシントンの蜜月時代

Ⅱ　大統領暗殺を取り巻く映画の世界と現実……映画『パークランド』より
（１）ケネディ大統領暗殺事件から政治不信まで、自信を失ったアメリカ
（２）危機を乗り越えたレーガン大統領が結ぶ政治と映画

Ⅲ　映画の中で大統領（リーダー）像は何を象徴してきたのか
　……映画『ホワイトハウス・ダウン』『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』より
（１）フィクション映画のアイコンとなる大統領像とは
（２）大統領選挙前後に作られた映画の大統領像を読む
（３）アメリカと日本の映画における政治との関係性の違い
　①　政治を描かない日本の映画
　②　日本の危機意識と映画における政治の捉え方

最後に

質疑応答

2019 年 3 月 19 日開催
第 69 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：アメリカ大統領とハリウッド　～政治と文化(映画)の関係を探る
講演者：村田 晃嗣（同志社大学法学部教授・前学長）

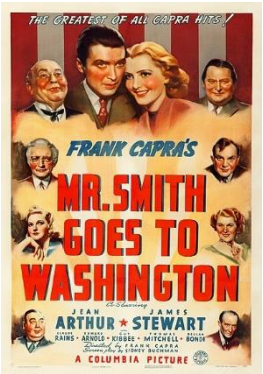
（文中敬称略）

Ⅰ　ハリウッド映画からアメリカの政治を知る……『スミス都へ行く』を観て

（『スミス都へ行く』を一部上映）

（1）背景となったアメリカの政治的事情

ハリウッド映画『スミス都へ行く』は、現職の上院議員が亡くなったために後任を補填しなければならないという話から始まる。ここで、この映画の背景となっているアメリカの政治的事情について説明すると、アメリカの議会は上院と下院からなっており、上院は現在 50 州から 2 名ずつ議員が出て 100 名で構成されている。昔は、上院議員は選挙ではなく州議会が選んでいたが、憲法の改正により今では下院と同じように選挙で選ばれている。ただし、この映画のように現職が在任中に亡くなると州知事が後任を指名する。そういう中での話である。



『スミス都へ行く』(1939)アメリカ映画／English: Illustrator unknown; work-for-hire on behalf of Columbia Pictures, Public domain, via Wikimedia Commons

①　アメリカ大統領選挙における人口対面積のジレンマ

今、アメリカで一番人口が多いのはカリフォルニア州の 3,900 万人だが、カリフォルニア州はトランプが大嫌いなので、彼が大統領に決まったときに市民が「カリフォルニア独立協和国を作ろう」という独立運動を起こし、気の早い人たちはモスクワに大使館までつくってしまった。しかし、アメリカ合衆国憲法には州が独立する規定がないので独立はできない。

これは EU とは逆で、EU は離脱が可能なため今もブレグジットで大騒ぎになっているが、合衆国は一旦入った州が出て行く規定がない。無理に出て行こうとすると南北戦争になってしまう。したがって、カリフォルニア州も独立することはできないが、もし仮にカリフォルニアがアメリカから独立すると、人口 3,900 万人、GDP の規模がイギリスやフランスを凌ぐ世界 6 番目の大きな経済力を持った国になる。ところが、この大カリフォルニアから選出される上院議員も 2 名だけである。

逆に、アメリカで最も人口が少ないのはワイオミング州の 60 万人である。日本でいうと島根県や鳥取県ぐらいだが、このワイオミング州からも上院議員は 2 名出される。日本でよく 1 票の格差が問題になるが、アメリカの上院の 1 票の格差は 60 倍を超えていることになる。

したがって、今のアメリカにおける民主主義の最大の問題として、選挙のたびに得票数では民主党が勝つが、面積では共和党が勝つという状況が生まれている。先の大統領選挙でも一般得票数ではヒラリー・クリントンが 200 万票以上多かった。つまり、票では民主党が勝っているが、過疎地に行くほど共和党が強いので、面積では共和党が勝つのである。この人口対面積のジレンマがアメリカの民主主義を大きく揺るがしている。

② 政治腐敗に１人で立ち向かう主人公を描く

映画ではこの上院議員に後任として新しくジェファーソン・スミスが選ばれ、汽車でワシントンにたどり着く。紹介したのは、ここまでである。

この映画はフランク・キャプラ監督の作品だが、フランク・キャプラはこれ以外にも『オペラハット』など、多くの心温まるハッピーエンドの映画を作ったアメリカの巨匠であり、『スミス都へ行く』は 1939 年に制作されている。1939 年は、ヨーロッパで第 2 次世界大戦が勃発する年である。まさに戦争が始まるときに『スミス都へ行く』という映画が作られたことになる。

この後の展開は、希望と理想に燃えたスミス上院議員に対し、ワシントンは極めて冷たく、ワシントンのジャーナリストたちは「地元の黒幕たちの傀儡に過ぎない」「こんな若者にワシントンでの政治ができるはずがない」とスミスをからかい抜く。実際に地元の大物たちも、もう１人の上院議員もスミスには何もさせず、言いなりに操ろうと思っている。

それでも、若いスミスは子どもたちのためにボーイスカウトの施設をつくりたいと思い、自分で法案を議会に提出しようとする。ところが、そのつくろうとしているボーイスカウトの施設の場所が、地元の黒幕たちがダムを建設しようとしている敷地だったので、黒幕たちはスミスの法案を潰すために、「スミスは政治的腐敗をしている」とバッシングしてスミスを悪者に仕立て上げ、辞職に追い込もうとする。スミスはこの状況を最後まで 1 人で戦い抜くという話である。

（２）描かれた政治腐敗と描かれなかった大統領

① 多数による専制が正義を潰す ～テーマはナチズム批判

『スミス都へ行く』の主人公の名前はジェファーソン・スミスだが、ジェファーソンはアメリカ第３代大統領の名前である。スミスは日本でいうところの「山田」や「山本」「田中」のようなよくある名前で、ごくありふれた一般市民を意味している。つまり、トマス・ジェファーソンの名前と一般市民の名前が融合した名前をつけて、彼こそがアメリカのシチズンシップを代表しているということを表している。

この映画は、結局、地元の黒幕たちがスミスを潰そうとして新聞を動員し、「スミスが政治腐敗をしている」と書き立て、ワシントンの新聞記者たちもそれに便乗する。誰もスミスを信じないので、最後までスミスは１人で戦い抜く。これは多数による専制である。民主主義は多数決の原理だが、他方で多数の者たちが間違っていたらどうなるのか、多数の者たち

が一時的感情で正義を潰すようなことがあったらどうなるかということをこの映画は問うている。それが現にヨーロッパで起こって、多数の人たちがナチズムによって正義を見失った。言わばこれはナチズム批判であり、それを乗り越えてアメリカの民主主義をどのように守っていくかということが、この映画で描かれている。

② 大統領を描かない理由

この映画の舞台は上院だが、上院議長は副大統領が務める。下院議長は、今は女性が務めていてトランプ大統領と戦っているが、下院の中で互選される。それに対して、上院議長は初めから副大統領と決まっていて、上院議員ではない。それはなぜなのか。アメリカは一つの州から 2 人ずつ上院議員が出る。今は 50 州だが、この映画が作られた頃は 50 もなくて最後にハワイが 50 番目の州になった。もしかすると、これからも理屈の上では州が増えるかもしれないが、アメリカの州の数がいくつになっても各州から二人ずつ上院議員が出るので上院議員の数は必ず偶数である。そのため、理論上は議会の意見が真っ二つに割れる可能性がある。そこで、意見が真っ二つに分かれたときだけ、上院議長が最後の 1 票を投票することになっている。そのため上院議長は上院議員の中から互選されず、副大統領が兼任するのである。それ以外に副大統領はほとんど用がないが、上院で意見が 50 対 50 に分かれたときだけ上院議長の最後の 1 票が効くことになる。

この映画の中でも上院議長として副大統領が出てくるが、じつは、最後まで大統領は出てこない。それは、テーマが政治的腐敗だからである。ベテラン政治家たちが地元の黒幕と結び付いて悪いことをしているという政治的腐敗に対し、スミスがどう戦うかという話だが、大統領はそのような政治的腐敗からは超然としていなければならない。大統領は国家のシンボルであり、政治的駆け引きや政治的腐敗とは無縁の立場なので、この映画の中に大統領自身は出てこないのである。

そして、この『スミス都へ行く』という映画は、「アメリカの民主主義がどのように機能しているか」という民主主義の教材として、今でもアメリカの中学校などでしばしば子どもたちに見せられる映画の一つとなっている。

ところが、この『スミス都へ行く』という映画が作られた頃、この映画をアメリカ国内はともかく、海外で上映するのは良くないのではないかという意見があった。黒幕に操られた政治家が悪いことをして、スミスが 1 人でそれに戦うという話なので、外国人がこれを見るとアメリカの民主主義に対して誤解が生まれるのではないか、あるいは不信を抱くのではないか、この映画はむしろ反米映画になるのではないかと考えられたため、「海外で上映すべきではない」という意見も根強くあったと言われている。

最も強くそう主張したのが、アメリカのイギリス大使だったジョゼフ・ケネディである。彼は後のジョン・F・ケネディの父親だが、「このような映画をヨーロッパで上映すればアメリカの評判が下がるのではないか」と上映に反対した。しかし、前述のように、この映画の

テーマは、一時的感情や間違った情報、今でいうフェイクニュースに操られた世論が正義を見失ってしまうとどれほど恐ろしいことになるのかという、じつはナチズム批判である。そして、ケネディ大使は大変な親ナチスだった。彼はアイルランド系で、祖国アイルランドを抑圧してきたイギリスのことが大嫌いだったので、ルーズベルト大統領に巨額の献金をし、合衆国の代表としてイギリスの大使になったが、結局ナチスドイツのシンパだったことから大統領になる可能性はなくなってしまった。それで、大統領になれなかった自分の代わりに、自分の子どもの 1 人を必ず大統領にするというのが彼の次の夢になったのである。

ジョセフ・ケネディ（1888 － 1969）／Wide World Photos, Public domain, via Wikimedia Commons

（3）アメリカ映画とアメリカ大統領の関係の変遷

アメリカの映画では、しばしば政治がテーマに取り上げられる。そして、しばしば大統領が出てくる。この『スミス都へ行く』には直接は出てこないが、ディナーの会場にはジョージ・ワシントンとエイブラハム・リンカーンの肖像画が掲げられているので、この映画にも大統領が登場しているといえば登場していると言える。

映画と民主主義、映画とアメリカ大統領には多くの共通点があるが、その一つが映画も民主主義も多数によって作られ、多数によって消費されるという点である。絵画や音楽は場合によっては 1 人で作ることができるし、バイオリンやピアノなどの演奏も 1 人でできる。しかし、映画という芸術はごくわずかな例外を除いて 1 人では作れない。監督、脚本家、俳優、照明、衣装等々、大人数の人によって作られるのが映画である。民主主義も 1 人ではできない。多くの人が協力し合いながら作られるものである。この点から映画と民主主義は似ていると言える。

さらに言うと、映画にも民主主義にもストーリーがある。ストーリーのない映画は駄作であり、民主主義が上手く機能するためにも、そこには人が納得するような物語性がなければならない。この点でも映画と民主主義は共通している。そしてこの両方を世界で代表しているのがアメリカだと言える。

① 映画が発明される以前のアメリカ大統領の位置付け

「映画はいつできたのか」という問いには簡単に答えられない。一般的には、19 世紀末にフランスでできたと言われるが、映画にもいろいろなタイプがあって、大きなスクリーンに映像が映って何十人、何百人がスクリーンを見つめながら一つの映画を観るのも映画の一つの観方だが、例えば、エジソンが最初に映画を発明したときは、小さな箱の中にモーションピクチャーがあって、それを 1 人で覗き込む方式だった。1 人で動画を見るのも映画だし、たくさんの人間が一つのスクリーンを観るのも映画の観方であり、何が映画の本当のオリジンなのかは必ずしも明らかではない。

ただ、今我々が観ているように一つの大きなスクリーンを皆で見るスタイルの映画については、19 世紀末にフランスでできたと言われているわけである。ところが、おもしろいことにそのように大きなスクリーンで同じ空間で何十人、何百人の人たちが一つの映画を観るというスタイルは、今や減っている。若い人たちは映画館に行かず、Netflix や携帯の画像で映画を観ている。つまり、今多くの若者たちは 1 人で画面を覗き込んでいるので、エジソンの映画の観方に回帰していると言える。このように、映画のルーツにもいろいろあるが、前述のように、一般的には 19 世紀末にフランスで起こったと言われる。自由・平等・博愛はフランス革命のスローガンで、民主主義もフランスから起こったので、映画も民主主義もフランスが原産地である。しかし、映画も民主主義も最も大規模に象徴しているのは、やはりフランスよりもアメリカになると思う。

映画が誕生した 19 世紀末は、アメリカがしだいに経済大国になり、イギリスの経済力を凌いで世界一の工業大国になった頃である。私が大学でアメリカの政治を教える中で、いつも学生に話しているのは「アメリカ合衆国の大統領はパワフルな存在だと思いがちだし、確かにアメリカの大統領はパワフルだが、それはアメリカという国がパワフルだからであって、国内の制度的に見ると、トランプ大統領が持っている権限よりも安倍総理が持っている権限の方が大きい」ということである。日本国の内閣総理大臣は衆議院を解散できるが、アメリカ大統領は議会を解散することはできない。さらに、日本の内閣は国会に対して予算案を提出できるが、アメリカは議会が予算を作るので大統領は議会に予算案を提出できない。したがって、議会が「メキシコとの間の壁になど予算をつけない」と言えば、大統領が何と言おうと予算はつかないのである。そのため、35 日間に渡って政府が閉鎖されるという事態が起きた。予算を決めるのは議会であり、大統領は議会に対して予算教書を送るが、それは「こういう予算を作って欲しい」という“お願いリスト”に過ぎないので、議会はこれを無視できる。つまり、国内の権限で言うならば、アメリカの大統領よりも日本の総理大臣の方がパワフルなのである。

そのことは合衆国憲法を見れば明らかである。アメリカ合衆国憲法の第 1 条は、大統領ではなく議会についての規定である。各国の憲法がどういう構成になっているかを見ると、その国の政治の仕組みがよく分かる。日本の場合は第 1 条が天皇で始まる。日本国憲法には前文と第 1 条の中にしか「主権在民」が書かれていないし、しかも憲法 1 条の天皇に関する規定の中で「主権の存する日本国民の総意に基づく」と書かれているだけで、独立した情報として「国民主権」とは書かれていない。これに対して合衆国憲法の第 1 条は議会で、大統領は第 2 条である。つまり、合衆国をつくり、憲法を草案したジェファーソンやワシントン、ベンジャミン・フランクリンなど、「建国の父」と言われる人たちは、議会こそがアメリカの政治の中心であり、議会がアメリカの政治を動かし、議会が決めたことを大統領は粛々と執行すればよいと考えていたのである。言わば、アメリカを会社に例えると議会が代表取締役であり、大統領は執行役員に過ぎないと建国の父たちは考えていたということである。

実際にアメリカの大統領と言っても、過去の人物でよく知られているのは初代のジョージ・ワシントン、第3代のトマス・ジェファーソンなどの初期の人たち、そして暗殺された南北戦争のときの第16代大統領エイブラハム・リンカーンくらいで、それ以外の18世紀、19世紀のアメリカ大統領の名前など、少なくとも日本人はほとんど知らない。それほど重要な人物が19世紀までのアメリカ大統領にはいない。つまり、大統領はそれほど重要な存在ではなかったのである。

② 映画の登場とアメリカ大統領の権力の増大

ところが、19世紀末に映画が発明され、アメリカが世界一の大国になった頃から大統領の役割が段々と大きくなった。

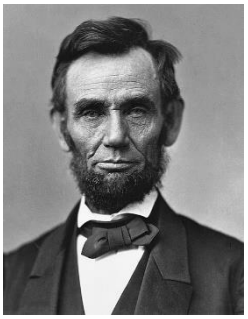
理由は二つあるが、一つ目は、言うまでもなくアメリカが大国になったからである。アメリカが小国だった頃は、小国の大統領などどうでもよかったのだが、アメリカが大国になるほど大国アメリカを代表するプレジデントの存在も大きくなっていったわけである。

二つ目は、行政府の役割が大きくなったことが挙げられる。政府の役割は、警察で国内の治安を守り、軍隊で外国からの侵略を防ぐだけではなく、教育や社会福祉に対する責任などいろいろな役割が増え、行政府は次第に大きくなっていった。それに比例して、行政府の長である大統領の役割も大きくなっていったのである。

このように、19世紀末からアメリカ合衆国の大統領の役割が大きくなっていったので、逆に言えば、アメリカが世界一の経済大国になり、大統領の役割が大きくなった頃に映画が登場したことになる。そして、当然、映画はしばしば大統領を描いてきたのである。

5年前、私は新幹線の中に置かれている『Wedge』という雑誌に記事を書き、その中で「映画に登場する実在の大統領ベスト10」を挙げたが、その歴史上実在した大統領の中で映画が頻繁に描いてきた大統領の1位は、何と言っても南北戦争のときの大統領だったエイブラハム・リンカーンである。

アメリカは第一次世界大戦、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争と多くの戦争を経験してきたが、じつはそのすべての戦争におけるアメリカ人の戦死者の数よりも南北戦争の戦死者の方が多い。つまり、南北戦争はアメリカの歴史の中で一番多くの戦死者を出した戦争だったわけだが、それは戦場がアメリカだったからである。アメリカは独立戦争を別にすれば、ほとんど海外で戦争をしている。ところが、南北戦争は言わば内乱であり、国が真っ二つに分かれて戦った国内の戦争なので60万人以上の戦死者を出している。アメリカにとって一番大きな犠牲を出した戦争とも言える。ちなみに、この頃から写真が普及し始め、兵隊たちは妻や子や親の写真を持って戦場に行き、地元に残る親や妻や子どもたちも父の写真を持って帰りを待った。当然、リン



エイブラハム・リンカーン（1809－1865）／アレクサンダー・ガードナー, Public domain, via Wikimedia Commons

カーンの写真も残っている。そのリンカーンはアメリカ史上一番大きな戦争だった南北戦争のときの大統領であり、しかもアメリカの歴史上で初めて暗殺された大統領なので、断トツで映画に描かれる回数が多く、2014 年時点で 29 回も描かれている。

次に多いのが初代大統領ジョージ・ワシントン、3 位が第二次世界大戦のときの大統領フランクリン・ローズヴェルトで、彼も在職中に亡くなっている。4 位はジョン・F・ケネディで、彼も在職中に暗殺された悲劇の大統領である。このようにアメリカ映画は好んで大統領をしばしば映画に取り上げてきた。

③　映画はいかに戦争に利用されたか

第二次世界大戦中には、『スミス都へ行く』のフランク・キャプラ監督もローズヴェルト大統領に頼まれて戦争の映画をたくさん作っており、『なぜ我々は戦うのか』というシリーズ映画を撮っている。また、西部劇の巨匠ジョン・フォードも『ミッドウェイ海戦』など数々の戦争映画を作った。人々の愛国心を掻き立てて戦い抜く気持ちを掻き立てることに映画がいかに役に立つか、政治は早くからそれに気づいており、有名な映画監督や俳優たちは戦争映画に協力していった。

『なぜ我々は戦うのか』(1942～)アメリカ映画／Gawain78, Public domain, via Wikimedia Commons

『スミス都へ行く』の主人公はジェームス・スチュワートという俳優である。彼は第二次世界大戦にパイロットとして従軍し、最後は大佐になっている。他に『風とともに去りぬ』のクラークゲーブルも従軍している。そのように男性の俳優たちは従軍し、一方で女優たちは戦争を戦うために政府の国債を購入するよう呼び掛けながら全国を駆け巡った。ゲーブルの妻も女優として国債を売りに回っていたが、その途中で飛行機事故により亡くなっている。ゲーブルは落胆し、一般的に有名俳優は安全な場所にしか配属されないのだが、妻の死の衝撃からゲーブルは自ら進んで危険な戦闘用の飛行機に乗り、実際に何度もパイロットとして飛んでいる。あるいは、タイロン・パワーも第二次世界大戦中に妻と別れ、男性の恋人とも別れて海兵隊に入り、戦後は GHQ として銀座の交差点で交通整理をしていたという有名なエピソードがある。このように、多くの映画監督や俳優が第二次世界大戦に駆り出されて戦争に協力しており、政府と映画が協力するという歴史はアメリカの中ではずっと続いている。

（4）戦後の映画産業とアメリカの政治

一方、ハリウッドは政治を批判し、権力を批判して描き続けてきたが、他方で産業としてはしばしば政府に協力してきた。これが日本とは大きく違う点である。日本は、戦争中は陸軍や海軍が命令して一方的にプロパガンダ映画を作らせたが、戦後、政府は映画と無関係になる。一方でアメリカでは、政府と映画の関係が第二次世界大戦から今日に至るまで続いている。

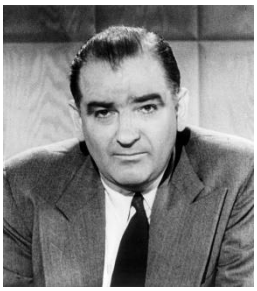
① 攻撃対象となったハリウッド

ところが、ナチスドイツを倒し、日本軍国主義も倒したアメリカは、第二次世界大戦が終わると今度は共産主義と戦わなければならなくなり、やがて米ソの冷戦に突入していった。この冷戦の中で槍玉に挙げられたのがハリウッドである。なぜハリウッドが攻撃の対象になったのかというと、ハリウッドにユダヤ系の人が多いことが理由の一つだった。ユダヤ系の人たちを抜きにしてアメリカの映画は成立しない。よく言われるように、アメリカの映画はユダヤ人が作って、カトリックが検閲して、プロテスタントが楽しむという構図になっている。

なぜハリウッドにユダヤ系の人たちが多いのか。映画産業はアメリカの歴史の中では大衆芸能と位置付けられ、言葉は悪いが卑しい産業と思われて、ハーバードやイエールやプリンストン大を出たようなインテリが就く仕事ではなく、貧しい人たちが一攫千金を狙って入る世界だと思われていた。したがって、WASP と呼ばれるホワイト・アングロ-サクソン・プロテスタントの人たちは銀行家や大学の先生になるが、マイノリティでアメリカ社会に遅れてやって来たユダヤ人たちは、成功の可能性を求めてエンターテイメントのビジネスに入っていったので、映画産業にはユダヤ系の人たちが大変多かったわけである。

また、彼らは才能豊かで成功したが、偏見や差別の対象とされた。第二次世界大戦中は皆が協力して、ナチスドイツやムッソリーニ、軍国日本を打倒するという目的で挙国一致だったが、戦争が終わるとユダヤ人に対する差別や偏見が再度表に出てきたのである。

ハリウッドが攻撃されたもう一つの理由は、映画がどれほどパワフルな存在かを政治側が知ってしまったということがある。映画を利用すれば多くの国民を動員できるし、愛国心を駆り立てられる。映画がそういう非常に力強いツールであることを政治側が知ったなかで、ハリウッドはユダヤ系が多く、さらに言えばリベラル、もっと言うならば左翼系の人たちが多いので、ハリウッドが左翼のイデオロギーに乗っ取られてそれに沿った映画を作ったら、共産主義がハリウッドに入って共産主義に操られた映画を作ったら大変なことになってしまうという恐怖心を持つようになったのである。実際にハリウッドは労働組合のストライキが非常に多かった。裕福な俳優たちはあまりストライキを起こさないが、衣装や照明、大道具などの裏方部門は労働組合が強く、ストライキを起こしていた。


ジョゼフ・マッカーシー（1908－1957）／United Press, Public domain, via Wikimedia Commons

このように「左翼に牛耳られたハリウッドは危険」という思いがあり、第二次世界大戦後、ハリウッドを中心に“赤狩り”が起こった。共産主義者の手先がハリウッドに浸透しているとして、共産主義者の摘発が 50 年代のアメリカで大きな勢いを持ち、多くの映画関係者が“赤狩り”の犠牲になった。議会に呼び出され、「あなたは共産党の党員か」あるいは「党員だったことがあるか」「共産党に協力したことがあるか」と問われ、「イエス」と答えると「赤」というレッテルを貼られて社会的に葬られたのである。その中心がジョゼフ・マッカーシーという上院議員だったため、この動きは「マッカーシズム」

と呼ばれ、50 年代のアメリカもハリウッドもそういう不幸な経験をすることになった。

じつは、この赤狩りが吹き荒れた 50 年代に、赤狩りに協力した人もいる。例えば、後にアメリカ合州国の大統領になったロナウド・レーガンは当時映画俳優だったが、全米俳優組合の委員長を務めていたので、「ハリウッドの中に共産主義の影響力が入ってきて危険だ」と議会で証言した。あるいは、下院の委員会の委員だったリチャード・ニクソンも後に大統領になる。同じように、下院議員として“赤狩り”に協力したのがジョン・F・ケネディで、弟のロバート・ケネディはマッカーシー上院議員のアシスタントだった。ケネディ一家もアイリッシュで、ケネディの父はマッカーシーの友人だったのである。このように、後にアメリカ大統領となるケネディ、ニクソン、レーガンの 3 人もがじつは赤狩りに加担していた。

やがて、マッカーシーが失脚し、“赤狩り”は沈静化していく。そして、1950 年代のアメリカ映画の一つの特徴として、次々におもしろい SF 映画が作られていく。宇宙人が攻めてくる、巨大な蜘蛛が街を破壊するなど、様々な SF 映画が作られたが、謎の宇宙人や巨大な毒蜘蛛やサソリの存在は、多くの場合、共産主義のメタファーである。共産主義の脅威が静かにアメリカの社会に浸透してくるという恐怖を SF 映画に置き換えて描いた作品が、50 年代に次々と作られたのである。

②　日本映画が描いた 1954 年の日本

じつは、日本でもそういう動きがあった。『ゴジラ』の第 1 作目が作られたのは 1954 年だが、これも 50 年代のアメリカの SF ブームと無関係ではない。ちなみに 1954 年は安倍晋三が生まれた年でもあり、安倍総理とゴジラは同い年である。

その 1954 年に、日本では 3 つの傑作映画が作られた。『ゴジラ』と黒澤明監督の『七人の侍』、そして木下恵介監督の『二十四の瞳』である。黒澤明は世界の黒澤と呼ばれるが、あまり女を描けない、男を描き続ける映画監督だった。それに対して、木下恵介は女性を描き続ける監督で、男を見事に描いた作品はほとんど見たことがない。黒澤は男を描き、木下は女を描き続けてきたということになる。

黒澤の『七人の侍』のメッセージについてはいろいろな読み方があるが、端的に言えば、野盗が攻めてきて村の収穫物をすべて持って行ってしまうので、ついに村人たちは決断し、七人の侍を雇って村を野盗から守り抜くという、つまり「自分たちは自分たちで守ろう」というメッセージに受け取れる。そして、この 1954 年は自衛隊ができた年でもある。自衛隊の誕生という社会現象と黒澤の『七人の侍』のメッセージは決して無縁ではない。

ところが、同年に作られた木下恵介監督の『二十四の瞳』は「戦争は絶対に嫌だ」というメッセージを発している。「子どもたちも夫も死んだ。戦争が終わって、我々は平和な小豆島をようやく取り戻した。もう二度とあんな戦争は嫌だ」というメッセージである。

黒澤と木下という日本を代表する映画監督が、同じ 1954 年に、一方は「自分たちは自分たちで守れ」という映画を作り、もう一方は「戦争は絶対に嫌だ」という映画を作っているわけだが、じつは、この 1954 年の精神分裂的な心理状況から、未だに日本は脱し切れてい

ない。この両方の思いを抱えながら 60 数年を歩んできたということである。

③　『ゴジラ』とは何者なのか

『ゴジラ』(1954)日本映画／Toho Company Ltd.（東宝株式会社）, Public domain, via Wikimedia Commons

さらに言えば、1954 年作の『ゴジラ』をご覧になった方も多いと思うが、かつて「ゴジラとは一体何者なのか」という問いが世界中に投げ掛けられた。『ゴジラ』で博士論文を書いた学者は山のようにいるし、『ゴジラ』で国際シンポジウムが何度も開かれている。「ゴジラとは何者なのか」というのは今日に到るまで大きな問いであり、これに関しては二つの解釈がある。

一つは「ゴジラはアメリカを象徴している」という説である。ゴジラはアメリカの原爆実験によって地中から蘇ったので、危険なアメリカの象徴と考えられる。また、1954 年作の『ゴジラ』を観ると分かるが、ゴジラは品川から東京に上陸して、東京の街を火の海にする。その 100 年前にペリーの黒船が現れたのが品川であり、その品川にゴジラが現れて、そこから東京の街を次々に破壊していくとなると、それは東京大空襲で米軍が破壊していった経路と同じである。したがって、「ゴジラはアメリカを示している」と言われるわけである。実際にあの映画では、若い女性が電車の中で「数年前に長崎で原爆を逃れたのに、東京でゴジラに襲われるなんて」と言うシーンがある。あるいは、ゴジラに街が破壊される中で、小さな子どもたちを連れた母親がもう逃げ切れないというところで、子どもたちを抱えて「一緒にお父様のところに行きましょう」というシーンもある。父親は戦争で死んだものと思われるが、父親もアメリカに殺されたし、自分たちもゴジラ＝アメリカに殺されるというのが一つの解釈である。

また、1954 年には自衛隊ができている。映画の中では「自衛軍」という名前で登場するが、自衛軍はゴジラの敵ではないのでゴジラに踏み潰され、ゴジラの炎に焼かれてなす術もない。そのように、もし自衛軍＝自衛隊が日本を守れないとなると、次に登場するのは言うまでもなく米軍である。1954 年には日米安全保障条約が締結されているので、自衛隊が国を守れないのであれば、次は在日米軍が出動してゴジラを倒すはずである。しかし、あの映画には 1 人のアメリカ人も登場しない。ゴジラ＝アメリカなのだから当然である。ゴジラがアメリカを代表しているとするならば、アメリカをアメリカが倒すわけがない。だから、あの映画で米軍は出動しないのである。

もう一つの解釈は、ゴジラは海の底から来るので、先の戦争でこの国を守るために太平洋の小島で散って行った兵隊たちの英霊の現れであるとする説である。「我々は命がけで日本を守るために太平洋の島々で戦い、飢え死に、あるいは米軍に殺され、火炎放射器で焼かれ、必死の思いで祖国を守った。しかし、我々が命を捨ててまで守った日本は、戦後わずか 9 年でアメリカの属国のようになっている。そして、日本の文化や精神を忘れ、物質的な繁栄だけを追い求めている。こんな国を守るために我々は死んでいったのか」という英霊たちの怒

りがゴジラとなって、戦後の日本に復讐するために来たという解釈である。そう解釈すると納得するところがある。ゴジラは東京の街を次々に破壊し、国会議事堂も NHK も破壊するが、皇居まで来ると U ターンして海に戻るのである。ゴジラが先の戦争で死んだ英霊たちであったとするならば、ゴジラが皇居を破壊できない理由も明らかである。

このように、ゴジラはアメリカであるという解釈や、先の戦争で死んでいった英霊たちであるという解釈がなされているが、1954 年にこの『ゴジラ』が作られた背景にも、核実験が繰り返されたという米ソの核軍拡と対立があり、アメリカで SF 映画が次々に作られたという影響も見ることができる。

④　ハリウッドとワシントンの蜜月時代

1960 年代になると、アメリカは再び華やかなヒーローを迎えることになる。黄金の声と人々を惹きつけるスマイルで語りかけたフランクリン・ローズヴェルトのように魅力的で、エイブラハム・リンカーンのように強いリーダーシップを持った大統領、ジョン・F・ケネディの登場である。弱冠 43 歳で大統領になった彼は、セオドア・ローズヴェルトを別にすれば、選挙で選ばれた大統領としては最も若い大統領である。ハンサムでハーバードを出たエリート中のエリートであるジョン・F・ケネディが大統領になって、アメリカは再び自信を取り戻し、ハリウッドも再び政治を前向きに描くようになった。こうして再びハリウッドとワシントンの蜜月時代が始まる。

ハリウッドはリベラルなので民主党政権を応援したがるし、民主党政権のときに非常に元気になる。共和党政権になると距離が開く。フランクリン・ローズヴェルトも民主党であり、50 年代のアイゼンハワーの時代が終わり、若いケネディが登場した結果、ハリウッドとワシントンの関係は近くなっていく。ケネディだけではなく、彼の妻であるジャクリーンも映画女優のように美しく、プレジデンシャルファミリー全体が絵になるので、映画のモデルのような大統領一家がワシントンにやって来たと言われた。

ジョン・F・ケネディ(1917－1963) ／White House Press Office (WHPO), Public domain, via Wikimedia Commons

しかし、ケネディはこれも映画の悲劇のように 1963 年に暗殺されてしまう。そのため、ケネディはアメリカの実在した大統領の中でも頻繁に映画に描かれる大統領となった。このケネディを間接的に描いたのが『パークランド』という映画である。

Ⅱ　大統領暗殺を取り巻く映画の世界と現実……『パークランド』を観て

（1）ケネディ大統領暗殺事件から政治不信まで、自信を失ったアメリカ

(『パークランド』を一部上映)

映画では、まずケネディがテキサス州のダラスで暗殺されるという説明がある。

じつは、タイトルの『パークランド』は、ケネディが撃たれた後に運び込まれた病院の名前「パークランド・ホスピタル」から来ている。ケネディを描いた映画はたくさんあるが、この映画の主人公はケネディではなく、ケネディの周辺にいた人たちであり、彼らがどのようにこの悲劇に巻き込まれたかということがテーマとなっている。ケネディを助けられなかった医者や看護婦、ケネディを守れなかったシークレットサービスや地元の警察、そして、たまたまケネディの暗殺を録画してしまった一般市民などが、この事件にどう巻き込まれていったかを描いたおもしろい映画である。

『パークランド-ケネディ暗殺、真実の４日間（2014 公開）ピーター・ランデスマン監督作品
(C)2013 Exclusive Media Entertainment, LLC.
All Rights Reserved.

私はアメリカの政治を勉強しているが、それでもこの映画を見て驚いた点があった。パークランド・ホスピタルにケネディが運び込まれたとき、彼は頭を撃たれていたので、もはや助からない状態だったが、いよいよ危ないというときに、医者がシークレットサービスに「一番近くのカトリックの神父を探して来なさい」と告げる。ケネディはカトリックなので死ぬときに秘跡を施さなければならないからだが、そこでカトリックのファーザーが呼ばれ、間もなくケネディは亡くなる。すると、その瞬間に手術室のドアが蹴破られ、地元ダラスの警察が入って来て、「地元で起こった殺人事件なので、この遺体は地元の警察が回収する」と言うのである。それに対して、周りを警備していたシークレットサービスは「殺されたのはアメリカ大統領だから、当然、遺体はワシントンに持ち帰る」と言うが、ダラス警察は、ダラスで起こった殺人事件の管轄権はダラスの警察にあると主張する。これがアメリカの連邦制度である。連邦政府の権限なのか、地元の州の権限なのかという話になれば、法律的には州警察が言っていることが正しくて、テキサスは独立した州なので、テキサス州で起こった殺人事件はテキサスで捜査し、テキサスで裁くことになる。まさに連邦政府と州の対立である。

さらに驚いたのは、ケネディの遺体が大統領専用機のエアフォースワンに運び込まれたときに、側近たちが「ジャクリーン・ケネディをエアフォースワンに乗せてよいのか」という相談をする場面である。ジョン・F・ケネディが死んだ時点でジャクリーン・ケネディはファーストレディではなくなり、エアフォースワンに乗る資格を失ったことになるので、ジャクリーンをエアフォースワンに乗せる法的根拠は何かという議論をしているわけである。このようなアメリカの官僚政治の冷たい現実も、この映画から見てとれる。

一方、ケネディが国葬で送られるのに対して、ケネディを暗殺したと言われるオズワルドが、葬式を行う牧師すらおらず、母親と数人の者だけで寂しく見送られる様子も描かれている。

ケネディはこのように在任中に悲劇の死を遂げて、言わば、第２のリンカーンとなって、再び様々な映画にテーマを与えることになった。

この後 60 年代には、ケネディがやり残したベトナム戦争が拡大していく。ジョンソン、さらにニクソンの下でも拡大し、ベトナムがどこにあるのかも知らないようなアメリカ人がベトナムで戦わなければならなくなり、「何のためにベトナムと戦うのか」も分からないまま、多くの人が犠牲になった。

さらに 70 年代には、大統領自身が引き起こしたウォーターゲート事件によってアメリカ人は政治不信に陥り、『スミス都へ行く』で描かれていたアメリカのデモクラシーは大丈夫なのかと不安になり、自信が揺らいでいった。経済的にもアメリカは日本や西ヨーロッパに追いつめられ、ぐらついていく。このように、国内ではウォーターゲート事件、海外ではベトナム戦争が起きて、アメリカは段々と自信を失っていった。

そういう中で、60～70 年代には陰謀物の映画が作られるようになった。CIA の陰謀、大統領の暗殺を軍部が企てる話や、政治的スキャンダルなど、そういう映画が盛んに作られており、アメリカ人の政治不信を映画がストレートに表現した形となった。

（2）危機を乗り越えたレーガン大統領が結ぶ政治と映画

その流れを食い止めた人物が、80 年代に映画界から来たロナルド・レーガンである。彼ほどアメリカの政治と映画の結合を象徴している人物はいない。自分自身が映画俳優だった人が、ついにアメリカ合衆国の大統領になったのである。映画のように、ハッピーエンディングに政治を編集していく手法をレーガンはとったわけである。

レーガンの話は紹介すると切りがないので、一つだけエピソードを紹介すると、レーガンにとって非常に映画的な出来事となったのが、1981 年 3 月に起こった暗殺未遂事件だった。大統領に就任して間もなく、レーガンはワシントンのホテルを出たところで狙撃された。彼は一命を取り留め、暗殺未遂を乗り越えたことで人気を博した。

じつはこの暗殺未遂事件は映画と密接に関係している。それは犯人のヒンクリーという若者がレーガン大統領を殺そうとした動機に因っているが、そこには政治的理由は全くない。犯人は精神的に病んでおり、有名な女優のジョディ・フォスターと自分が付き合っていると思い込んで何度も彼女に手紙を書いたが、返事をもらえないので、何とかしてジョディに振りむいてほしいという思いから、大統領暗殺を企てたのである。なぜ大統領暗殺かというと、ジョディ・フォスターが 14 歳の売春婦役で衝撃的なデビューを果たした、1976 年のマーティン・スコセッシ監督作『タクシードライバー』という映画の中に、主人公が大統領候補を暗殺しようとするエピソードが出てくるからである。つまり、『タクシードライバー』の主人公のように大統領を暗殺すれば、ジョディが自分のことを振り向いてくれるのではないかと思ったのである。それがこの事件の背景である。

さらに言えば、『タクシードライバー』という作品は、主人公が大統領候補を殺そうとするエピソードが無くても成立する話である。それなのに、なぜそのエピソードが挿入されているかというと、実際に人種差別主義者だったウォーレスというアラバマ州知事が、白人と

黒人を永遠に隔離しようと主張して 1972 年の大統領選挙に立候補し、暗殺未遂に遭ったという事件が起こっており、それをベースとしているためである。そして、このエピソードを基にレーガン大統領暗殺未遂が企てられたので、現実の出来事が映画のエピソードになり、映画のエピソードが再び現実の出来事になったことになる。

もっと突き詰めると、1972 年のウォーレス暗殺未遂事件で、犯人がなぜウォーレスを暗殺しようとしたのかというと、それは人種差別に反対だったからではなく、それ以前にスタンリー・キューブリック監督が作った『時計仕掛けのオレンジ』という有名な映画に触発されたからである。この映画は近未来の若者のバイオレントな生き方を描いた作品で、犯人はこの『時計仕掛けのオレンジ』で描かれた若者たちのバイオレントな様子に影響を受け、自分もバイオレントなことをしたいと思って大統領候補の暗殺未遂に至ったのである。映画が現実の暗殺未遂事件を引き起こし、それが映画のエピソードになり、再びレーガン大統領の暗殺未遂事件になったという、二重三重に映画と現実が重なったのがレーガン大統領暗殺未遂事件だったのである。

しかも、レーガンがワシントンで撃たれた日は、ロサンゼルスでアカデミー賞の授賞式が予定されており、大統領が撃たれたという事件を受けて、アカデミー賞の授賞式は 2 日延期された。さらに、レーガンが撃たれた際、大統領を専用のリムジンに押し込んで一番近いジョージ・ワシントン大学病院に運んだシークレットサービスの隊長は、シークレットサービスのような特殊な職業を選んだ理由として、子どもの頃にシークレットサービスの映画を見ていたからと答えている。そして、彼が子どもの頃に見ていたシークレットサービスの映画で主人公を演じていたのがロナルド・レーガンだった。つまり、このレーガン暗殺未遂事件は幾重にも現実と映画が関わり合っていたわけである。

そして、レーガンがこの危機を見事に乗り切って、言わばハッピーエンディングにしたことによって、レーガンの政治的基礎が固まったと言える。著名な監督で俳優のオーソン・ウェルズは「ストーリーがハッピーエンディングになるかどうかは、どこで終わらせるかによる」と言ったが、まさにレーガンは一歩間違えればリンカーン暗殺、ケネディ暗殺に匹敵するような一大悲劇になりかねなかった出来事を、見事にハッピーエンディングにしたことになる。

やがて冷戦が終わると、ハリウッドは大統領の個人的なスキャンダルを盛んに描くようになっていく。

もう一つ大事なのは、ケネディやローズヴェルト、レーガンといった実在の大統領だけでなく、フィクションの大統領も描いていることである。そこで、フィクションの大統領が描かれた『ホワイトハウス・ダウン』と『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』を続けてご紹介する。

Ⅲ　映画において大統領（リーダー）は何を象徴してきたのか

……『ホワイトハウス・ダウン』『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』を観て

（1）フィクション映画のアイコンとなる大統領像とは

（『ホワイトハウス・ダウン』『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』を一部上映）

『ホワイトハウス・ダウン』も『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』もローランド・エメリッヒ監督の作品だが、『ホワイトハウス・ダウン』の大統領は黒人で、『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』の大統領は女性である。ハリウッドはフィクションの大統領をたくさん描いてきたが、黒人や女性の大統領も昔から描かれている。例えば 1980～90 年代は、隕石が地球に向かってきて地球が滅びるかもしれないという話や、大津波が起きてアメリカ中が巻き込まれるようなパニック SF 映画に黒人の大統領が登場することが多かったが、これは、どれほど恐ろしい映画でもフィクションだと分かるようなアイコンとして、現実にはあり得ない「黒人の大統領」というものを作り上げたためである。しかし 2008 年に黒人であるバラク・オバマが大統領になったことで、黒人大統領の登場が非現実の記号にならなくなった。この『ホワイトハウス・ダウン』は、逞しい優秀な黒人の大統領がホワイトハウスで襲われ、白人の警官が大統領を守るというドラマである。

（2）大統領選挙前後に作られた映画の大統領像を読む

『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』では女性の大統領が宇宙人の襲撃に立ち向かうが、国防長官と共に殺されてしまう。この映画が公開されたのは 2016 年、つまり前回の大統領選挙の年である。そう考えると女性大統領の登場はヒラリーへの応援メッセージにも見えるし、一方で映画の中では殺されてしまうので、女性大統領はやはりダメかという思いが込められているようにも見える。現実には、女性大統領はまだ登場していないが、このように女性大統領を描いたハリウッド映画は多い。

ここで大事なことは、前回の大統領選挙の 2016 年に『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』が公開され、その前の 2012 年にスティーヴン・スピルバーグ監督が『リンカーン』という映画を作ったように、大統領選挙の前後に大統領が登場する映画が多く作られているということである。そして、間接的にハリウッドは自分たちの応援したい理想の大統領を描くことで民主党の大統領を応援することが多い。ここにも映画と政治の関係を見ることができる。

（3）アメリカと日本の映画における政治との関係性の違い

①　政治を描かない日本の映画

最後に、アメリカの映画の中で描かれる大統領や政治と映画の関係に比べて、日本の映画はどうなのかということについて触れたい。

これには明確な特徴があり、日本の映画と政治はほとんど関係がない。アメリカの場合、

少なくとも 20 世紀以降は大統領がアメリカの政治を象徴してきたので、大統領を描けばアメリカの政治のかなりの部分を描いたことになる。ところが日本は、戦前は天皇が国家元首であり、総理大臣もいたが、他に陸軍や海軍もあった。また、天皇や皇族を映画で描くことも、戦前は不敬罪に問われたのでできなかった。邪馬台国の卑弥呼の映画を作った人が罪に問われたほどなので、天皇を描いた映画など絶対に作れない時代だった。さらに戦前の民主主義は限定的だったので、総理大臣や陸軍大臣、海軍大臣をからかうような映画も作れず、政治を正面から描くことはほとんどなかった。

戦後は民主主義の世の中となり、総理大臣も天皇も描けるようになったが、実際はあまり作られていない。それは描くに値する出来事がなかったからである。その理由の一つは、これは日本にとっては幸いなことだが、第二次世界大戦後の日本には戦争がなかったことが挙げられる。リーダーを描くのは危機のときが一番描きやすいのだが、戦後の日本には大きな危機がなく、総理大臣が体を張って国を守らなければならないような事態が起こっていないので、総理大臣や政治家は映画にしにくい存在だった。天皇も、昭和天皇が存命中に戦前の昭和天皇を描くことはまだまだタブー意識が働いていたと思う。したがって、日本の映画は天皇や政治家を正面から描くことがまだ非常に少なかった。

そういう意味で象徴的なのは、日本映画の中で自衛隊が最も多く戦った相手がソ連でも北朝鮮でも中国でもなく、ゴジラだということである。つまり、日本の脅威はフィクションだということになる。

②　日本の危機意識と映画における政治の捉え方

その様子が変わってきたのは 90 年代以降である。90 年代以降、少しずつ映画の中で政治家や総理大臣が描かれるようになった。それは、戦後の日本が初めて危機に直面するようになったからである。最初は『亡国のイージス』のような映画で、北朝鮮のテロリストが自衛隊の船を乗っ取るという設定である。これは 90 年代以降、北朝鮮が日本の安全保障にとって危機だと日本人が思い始めたため、映画がテロやそれに類するテーマを取り上げるようになったわけである。

最近では『シン・ゴジラ』が挙げられる。果たして『シン・ゴジラ』がアメリカの象徴なのか、東日本大震災のような途方もない自然災害の象徴なのかは定かではないが、そういう危機の中で政治家が少しずつ描かれるようになってきたのが日本の特徴である。そのように、日本の映画では政治を正面から扱ったものがアメリカに比べて非常に少ない。

韓国は日本よりも多く政治を描いている。これは大統領が国を代表しているということでもあるが、ただ、韓国の映画の特徴として反共、反日が強く描かれており、そのような否定系の感情を前提にした映画がたくさん作られている。これに対してアメリカの映画は、どこかで底抜けにアメリカの民主主義を肯定するポジティブな映画が作られている。この点でもアメリカの政治と映画の関係は格段に深いと感じる。

最後に

今回の話の内容については、『大統領とハリウッド』という中公新書から出版された私の本にも紹介しているので、関心のある方はお買い求めいただければと思う。また、今私が読んでいる本で、大学院の授業で使おうと思っているのが『Hollywood, the Pentagon and Washington』だが、これにはアメリカの戦争映画がどのようにアメリカのミリタリーストラテジーに影響を与えたのか、あるいはアメリカの軍がどのように映画を利用しようとしたかが書かれている。

例えば、80 年代に大ヒットしたトム・クルーズ主演の『トップガン』という映画があるが、あれはアメリカ海軍が全面協力している。『トップガン』がヒットしたお蔭で海軍はリクルートメントに困らなくなったほどである。ただし、海軍は全面協力の際に条件を一つ付けていている。それは『トップガン』がパイロットの物語ということで、そのまま撮られると映画を観た人が海軍か空軍か区別がつかないので、海軍の協力が分かるように海を映してくれという強いリクエストだった。アメリカでは軍隊も映画を上手く利用しているという一例である。

質疑応答

Q1　『猿の惑星』の猿は何者なのか
Q2　ハリウッドはなぜイスラム世界を描かないのか
Q3　メディアの変化に伴って世界はどのように変わるのか
Q4　今後、アメリカの政治は映画を通じて世界にどのような影響を与えるのか
Q5　ハリウッド映画は日本人をどのように描いてきたのか
Q6　アメリカ映画にジェンダー問題やタブーはあるのか
Q7　メディアごとに政治の描き方に違いはあるのか

Q1　『猿の惑星』の猿は何者なのか

政治と文化について考えたが、有名な『猿の惑星』の猿は何を喩えているのか。

（村田）

『猿の惑星』は 1968 年の映画だが、人間が猿に支配されるというストーリーは、時代背景から考えて、アメリカ社会のコンテクストでいうと公民権運動である。黒人が権利の拡大を主張し、やがて白人が黒人に追いやられるのではないか、白人と黒人の地位が逆転するのではないかという恐怖であり、アメリカで実際に起こったことと重ね合わせれば猿たちは黒人ではないかというのが一つの見方である。

ただ、あの映画の原作者はピエール・ブールというフランス人で、彼が書いた小説で『猿の惑星』の他にもう 1 本映画化されているのが『戦場にかける橋』という有名な小説である。作者は第二次世界大戦中に東南アジアのフランス領インドシナで抗日運動を行い、日本陸軍に捕まって捕虜収容所で拷問を受けた経験があり、それを基に書いたのが『戦場にかける橋』である。そう考えると『猿の惑星』は、猿のように残酷で醜い日本が第二次世界大戦に勝っていたら、世界はどれほどおぞましい世界になっていたかということが前提としてある。つまり『猿の惑星』の猿はじつは日本人ということである。

Q2　ハリウッドはなぜイスラム世界を描かないのか

ハリウッドではあまりイスラムを描いていないように思う。リベラルなハリウッドという話があったが、リベラルでも宗教には畏敬の念があるのか。

（村田）

ハリウッドはそれなりにイスラム教徒を描いていると思うが、それでも少ないと思われるのは、一つにはハリウッドにユダヤ系の人が多いという背景がある。イスラエル対イスラム教世界の対立があり、ユダヤ系の人たちが多いことが正面からイスラム文化圏を描かない一つの理由かもしれない。また、イスラム教徒が描かれるときはしばしば単純なテロリスト扱いされてしまうことがあり、それに対して 90 年代にはイスラムの方から「ステレオタ

イプで、自分たちを単純な枠にはめてバカにしているのではないか」と批判もあった。

もう一つ、イスラム文化圏がハリウッドにとってはまだそれほど大きなマーケットではないことも大きな理由かもしれない。例えば、『インディペンデンス・デイ-リサージェンス』は宇宙人が地球に攻めてくる話で、1996 年に 1 作目の『インディペンデンス・デイ』が作られ、20 年後により大規模な攻撃による『-リサージェンス』が作られたが、第 1 作で宇宙人の攻撃に対してアメリカ大統領を中心に人類が立ち上がったとき、米軍と共に戦ったのはロシアと自衛隊だった。ところが、第 2 作の『-リサージェンス』で米軍と共に戦ったのは中国軍で、日本人は出てこない。これはハリウッドにとって、今や中国がどれほど大きなマーケットかということを表している。中国でヒットしなければ大きな収益は見込めない。リーマンショック以降、ハリウッド自体が資金調達に苦労しているため、中国資本がどれだけ入ってくるかが重要であり、中国からお金を借りなければ大きな映画は作れないのである。

ところが今、米中関係は貿易だけではなく、厳しいものになっており、アメリカ人の中でもトランプ大統領の共和党だけではなく、民主党も含めて中国に対する見方が厳しくなっている。その中でも中国が映画の大きなマーケットであることは事実であり、中国から資金調達をしなければならないなかで、中国をどのように描くかというのはハリウッドにとって非常に大きく、かつ難しい課題となっている。それに比べると、イスラムはマーケットとしてまだまだ小さいということがイスラムを描くことが少ない理由だと思う。

Q3　メディアの変化に伴って世界はどのように変わるのか

1963 年 11 月、日米の衛星放送が初めて行われた日の朝、テレビにケネディ暗殺の映像が映り、幼かった私は初めて世界を意識した。そのようにメディアが大きく変わるときに世界も変わってきたように思う。アメリカの映画はトランプ大統領の人物像もあるが、今や若者がスマホで、1 人で映画を見る時代になり、これからはどうなると考えられているのか。

（村田）

難しい問題で簡単には答えられないが、政治とメディアの関係で、新しいメディアが登場したときに政治がどのようなリアクションを起こすかということで言えば、例えば 18 世紀に新聞が登場したとき、権力は最初「現実の政治にほとんど影響を及ぼさない」と新しいメディアを過小評価した。ところが、実際に新しいメディアが政治に大きな影響を及ぼし始めると、今度は過大評価して、政治がメディアをどう利用するか、どう取り込んでいくかに一生懸命になる。メディア側も政治に協力するのかどうかを考え、それでも近づき過ぎて取り込まれたくないので、権力、政治とどれほど距離を置くかに迷いながら揺れ動く。したがって、権力側とメディア側が互いに様子を探りながら、しばらくすると双方の関係はある種の安定を得るようになる。

ところが、その頃にはまた新しいメディアが出てくる。19 世紀にはラジオが登場し、それから半世紀もしないうちにテレビが登場した。さらに今は、インターネット等々が出てきている。この状況から考える問題は、新聞からラジオの登場までは 1 世紀以上かかり、ラジ

オからテレビの登場まで半世紀近くかかったのに対し、最近は携帯電話の普及以降、電子メールなどが普及し、大人たちが携帯を使えるようになってようやくメールのサービスを使えるようになる頃には、学生たちはもうメールを使わなくなっているというように、新しいメディアの登場の間隔が短くなっていることである。同志社大学でも入学した学生に学生用の E メールのアカウントを与えるが、今や学生は LINE を使うので E メールのアカウントは意味がなくなっている。また、大人は Facebook を使うが、若者はほとんど使わない。Facebook は大人の遊びなので若い人には関係がない。そして、大人がようやく LINE に追いついた頃には、若者はインスタグラムに移行している。このように、新しいメディアが登場するインターバルが段々と短くなり、メディアと社会、メディアと政治との関係がどう落ち着くのか、両方が相互理解をできないうちに次のメディアが登場して混乱を引き起こしている。

また、LINE やショートメール、ツイッターは文字数が限られているので、それに慣れると人間の思考は少ない文字数でしか表現できなくなり、複雑なことを考えられなくなる。また常に携帯に触っていないと落ち着かなくなって、夜中も枕元にないと不安だし、人の話を聞いているときも携帯を触るようになる。つまり、人間の文化的な嗜みやマナーを悪くするし、思考を短絡的にする。これは若者だけではなく中高年も同じである。そのようにメディアと社会、メディアと政治の関係が乾き切る前に次の色が塗られているということが、最近の一番大きな混乱の原因ではないかと思う。

それから、ドナルド・トランプは現象であって原因ではない。ただ、トランプのようにツイッターで呟き続けるようなタイプの政治家でなければ今後も成功しないかどうかは分からないが、私はトランプのようなキャラ立ちした政治家はそう簡単に出てこないと思う。トランプを模倣する政治家は出てくるかもしれないが、トランプのようにメディアなどで世論を上手く操作できる政治家が次々に出てくるとは思えない。それは、レーガンを模倣した政治家は多かったが、第 2 のレーガンはほとんどいなかったことからも分かる。そういう意味では、第 2、第 3 のトランプが次々に出てくるというほど私は悲観的ではない。

Q4　今後、アメリカの政治は映画を通じて世界にどのような影響を与えるのか

アメリカの政治と映画の関連を時系列で話していただいたが、アメリカは大戦後約 10 年おきに大きな戦争をしながら経済を発展させており、映画も同様の歴史を辿っていると思う。一方で 1980 年代末に東西冷戦が終わり、2003 年にイラク戦争が起きるまでの間の 1998 年に『ディープ・インパクト』と『アルマゲドン』が公開されたが、これらは地球に巨大隕石衝突という危機が訪れたため、アメリカを中心に核爆弾を利用して隕石を回避しようとする映画である。核軍縮の声が上がり、「核兵器は必要なのか」という世論が広がっていたタイミングであのような映画が登場した意味は、アメリカの世界に対する「核兵器は人類を守るために必要だ」というアピールではなかったのか。アメリカの政治がハリウッド映画を利用して当時の世論を動かそうとしたように感じた。世界に対するハリウッド映画のアピ

ールする力は大きく、特に民主主義国家に対しては大きな影響力を持っているので、今後も戦争が起きる度にアメリカがハリウッドを利用したら、世界にどのような影響を与えると思われるか。

（村田）

『ディープ・インパクト』に登場する大統領はモーガン・フリーマンが演じており、巨大隕石が地球に衝突するという設定そのものが、大統領を黒人にすることによって、SF であって現実ではないというメッセージになっている。しかし、その後オバマ大統領が登場したので、黒人を大統領にすることが非現実の印にはならなくなった。これからの描き方としては、黒人の大統領はこれからも描き続けられるし、実際に女性の大統領が登場するかどうかは別にして女性の大統領も描かれ続けるし、多分、ラティーノの大統領も描かれると思う。もしかすると、将来的にはゲイやレズビアンの大統領や閣僚が描かれるかもしれないし、アメリカが代表している社会的多様性を映画がどうアピールしていくかは一つのメッセージ性としてあると思う。トランプ政権がいくら壁をつくろうとしても「アメリカはこんなに多様でさまざまな価値観の人が共存している」というダイバーシティ・メッセージをアメリカは発信し続けていくだろうし、現実以上にそれを誇張してハリウッドは発信し続けていくだろうと思う。

それに関連して、『ホワイトハウス・ダウン』も黒人の大統領が登場するが、ホワイトハウスで襲われた大統領を白人の警察官が救うというストーリーは、80 年代以降繰り返し描かれてきたバディ映画と言われる白人と黒人の相棒物である。最初は白人と黒人が人種で対立しながら、さまざまな危機を乗り越えるうちに互いに理解し合い、最後は親友になるが、これにはアメリカの中で黒人の中産階級が増えてきたという背景がある。彼らをいかにハリウッド映画のマーケットに取り込むかが重要になるなかで、黒人がいつも奴隷や迫害される脇役で、白人ばかりが主役のハリウッド映画など黒人の観客は観たくないだろうと考えるようになり、80 年代以降の映画では、黒人を重要な役割を果たす主要な登場人物にする流れが出てきた。中産階級化した、白人化、高学歴化、高所得化した黒人たちをハリウッドのマーケットにいかに取り込むかが一つの戦略としてあったわけである。

しかしバディ映画の特徴として、黒人と白人が反目しながら仲良くなっていくも、常に白人優位である。白人的価値観を持った黒人が映画の中で描かれ、今度はそれがラティーノやイスラムの人たちを含めてさまざまな人種、宗教、ジェンダーなどの背景を持った人たちへと広がっていくことが、ハリウッドの一つの戦略としてあるのではないかと思う。

確かに「核は地球を守る兵器として冷戦が終わっても必要だ」というメッセージ性はどこかに秘められているかもしれない。さらに言うならば、冷戦の終結によって地球上にアメリカの明確な敵を設定することが困難になったので、超自然現象や宇宙からの脅威があの時期に強調されたと思う。ところが、21 世紀になるとテロなどが映画の中で盛んに描かれるようになったというトレンドを、ご指摘の映画は示しているのではないかと思う。

Q5　ハリウッド映画は日本人をどのように描いてきたのか

いずれラティーノなどの大統領が描かれるのではないかと言われたが、その先に日系人の大統領は登場すると思われるか。また、アメリカ映画における日本人の描かれ方に違和感があるが、どう思われるか、あるいは、時代の流れとともに変わった部分があるのか。

（村田）

今、日系人はアメリカ社会で減っている。政治的な現象として、アメリカ国内でもサンフランシスコなどいろいろな街で従軍慰安婦像が建てられ、大阪市長がサンフランシスコとの姉妹都市提携を解消したと言っているように、都市部で韓国系、中国系の人口が増えているのに対して日系人の人口は減っている。ハワイでも日系人の人口をフィリピン系が上回っている。そういう人口構成上、日系人以外の人たちの政治的なニーズに答えた方が選挙に当選しやすいという政治の現実もあって、日系人を描くことは映画のマーケット的にも旨味がない。

日本人ということで言えば、オードリー・ヘップバーンを有名にした映画『ティファニーで朝食を』では、出っ歯で黒眼鏡の日本人が同じアパートの住人として登場している。近眼・黒メガネ・出っ歯・小柄な日本人というのが一つのステレオタイプである。これはイメージだけではなく、日本軍が真珠湾の奇襲攻撃に成功したときに「日本人は近眼だからゼロ戦などを精密に操縦できない」と本気で思っていたアメリカ人が結構いたので、ステレオタイプが現実を動かしてしまうこともあるように思う。

また 80 年代は猛烈に働く、集団で移動する英語のできない日本人というイメージがあったが、それに比べると、今はアメリカ社会の中で数は減っているものの日系人が高学歴化し、高所得化して成功している人も多く、医者や弁護士の専門職も多いことから、映画の中の日本人のイメージはかつてほど差別的ではなくなったと言えるのではないか。

もしかすると、今後アジア系の大統領が描かれることがあるかもしれないが、恐らく今のアメリカのトレンドからすると、日系、チャイニーズ、韓国系が混じり合って、半分白人で半分日系、母親はチャイニーズもフィリピーノも入っているというミクスチャーなアジア系が描かれるようになるのではないかというのが私の印象である。

Q6　アメリカ映画にジェンダー問題やタブーはあるのか

ヒラリーが選挙で負けたときに「ガラスの天井は存在した」と言ったが、アメリカの政治と映画の関係のなかでジェンダー問題は存在するのか。またアメリカ映画のタブーは何か。

（村田）

ヒラリーが選挙に負けた理由は、民主党は得票では勝つけれども、田舎に行くほど僅かな票で共和党が勝つので選挙人の数で負けてしまうという、大統領選挙の仕組みそのものの問題点と共に、女性であることとは別に、ヒラリーに対する個人的な反発もあったようである。「トランプを支持する人たちは嘆かわしい人だ」と言ってしまう人間性や、クリントン財団が巨額の金を集めたというスキャンダラスな部分など、ヒラリー自身が持っているネ

ガティブなイメージもあると思う。

ジェンダーについては、アメリカ映画はこれまでも描き続けてきたし、トランプ政権になって顕著なのはLGBTの人たちを正面から描く映画がさらに増えたことである。LGBTはレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーなどの性的マイノリティの人たちのことで、日本でも人口の7%強、左利きの人や血液型AB型の人よりも多いと言われているが、こうした人たちを正面から描いた映画が増えている。

アメリカ映画のタブーは分からないが、もしかするとトランプを熱心に支えている層を描くことは忌避されているかもしれない。トランプを熱心に支持している層にはいくつかの特徴があるが、特に白人・男性・高卒の40～50代が多いという特徴があり、このカテゴリーの人たちはアメリカの中でも顕著に平均寿命が下がっている。その原因は主に脳卒中や心筋梗塞、肺ガンなどだが、これは過度の喫煙・飲酒・ドラッグによるもので、また自殺なども多い。つまり、以前なら高校を出て一生懸命に働けばそれなりに家を持てたし、車も何台か買えたし、子どもたちを大学に行かせることもできたというアメリカンドリームがなくなってしまった人たちで、そのような中西部の人たちの暮らしぶりを正面から映画で描くのは難しいと思う。そういう人たちの不満を上手く吸い上げているのが今のトランプではないかと思っている。

Q7　メディアごとに政治の描き方に違いはあるのか

海外ドラマが好きでCSやNetflix、Amazonなどいろいろなコンテンツで観るが、映画館で上映される映画、ケーブルテレビのコンテンツ、NetflixやAmazonなどのオリジナルコンテンツなど、それぞれのメディアによって政治の描かれ方や関係性の違いがあるのか、違いがあればどのような違いがあるのか。

（村田）

NetflixやAmazonプライムなどの新たな媒体やテレビドラマは連続性のあるもので、映画は1時間半～2時間に収めなければならないのに対し、連続性のあるものはシリーズ化されると1回45分でも十数回にわたって政治の細かい駆け引きを描くことができる。ホワイトハウスを扱っても、シリーズ化されるほど大統領や側近たちの動きを毎回エピソードで細かく描けるわけである。

ただ、アメリカの政治の細かい話になればなるほど、アメリカ人以外には「何故こんなことが議会の間で問題になるのか分からない」とか「アメリカの憲法が分からない」「共和党と民主党の関係が分からない」ということになって楽しめなくなってしまう。したがって、アメリカ以外をマーケットにして作られるエンターテインメントの場合、それをいかに分かりやすく伝えるかという仕組みを考えなければならない。その点、宇宙人が攻めてきたり、ホワイトハウスが破壊されたりする話であれば、アメリカの政治の仕組みを知らなくてもエンターテイメントとして楽しめる。このように、ノンアメリカンが楽しめるような仕組みを作らなければマーケットが広がらないという難しさを抱えている。

ご指摘をいただいたのでさらに述べると、日本において戦後もアメリカのように政治を正面から扱った優れた映画が少ない理由の一つとして、作り手の才能の問題がある。アメリカの場合は才能のある人がハリウッドに行く。それはハリウッドに金があるからである。どのような国でも、金があって儲かるところに優秀な人が集まるのは明白である。しかし、日本の映画産業はハリウッドほど儲からないので、日本で最も才能のある人が映画産業に行くかというと、そうではない。日本のエンターテインメントの部分で最も才能のある人は比較優位を持つアニメに行き、必ずしも映画産業に行かない。日本の映画産業はハリウッドのように潤沢に資金を持っていないし、最大の問題として海外マーケットを期待できない。日本が映画を作ってもヨーロッパや中国での大ヒットは想定できないので、日本の映画産業はドメスティックマーケットで売っていかなければならない。したがって、大きな商売ができないのである。

そのため、ここ 20 年ほどの日本の映画産業は、安全な方法としてテレビでヒットしたドラマを映画化している。『踊る大走査線』を大袈裟なストーリーにして、レインボーブリッジを封鎖すれば 2 時間の映画になる。つまり、テレビのヒット作品を映画化するのが日本の映画産業の一つの安全パイの駒の振り方となっている。

ところが、ここで問題になるのが放送法である。日本の放送法の第 3 条には、テレビは政治的に忠実であること、つまり政治的公正が明記されている。公共の電波を使うためである。そうなると、日本のテレビドラマは共産党と民主党が悪くて自民党優位なストーリーを作れないし、その逆も作れない。アメリカならレーガン大統領やケネディ大統領を主人公にした映画を作れるが、日本のテレビで鳩山由紀夫や中曽根康弘、田中角栄を主人公にしたドラマは作れないと思う。放送法の規定が日本のテレビ局が極めて政治に踏み込んだ番組を作ることを躊躇させているのである。テレビでヒットしたものが映画化されることが一つのパターンだとすると、日本の映画が政治的に迫力のあるものを描くことはなかなか難しい。そういう仕組みが働いているように思う。

発 行 日	2024 年 4 月 30 日
講演著者	村田　晃嗣
編集発行	公益財団法人　国際高等研究所
	<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ　大仲佐代子

ISSN 2759-0577

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）